

## 学位請求論文審査報告書

氏名 川口 淳

論文題目 清沢満之における「他者」—その思想と問題を巡る考察—

審査委員 主査 本学教授 加来 雄之  
副査 本学准教授 福島 栄寿  
博士（文学） [大谷大学]  
副査 大谷大学名誉教授 安富 信哉  
博士（文学） [大谷大学]

### 1. 論文内容の要旨

明治を代表する思想家・清沢満之（1863-1903）については、讃仰と批判とが繚乱し、相互に相容れない様相を呈している。その理由は、清沢の思想が、単なる学説にとどまらず、この人世をどのように生きるのかという実践の問題に深く食い込んでくる性質を有することと、「近代親鸞教学」（本多弘之氏）と名づけられるような極めて特異的な教学の伝統を形成する嚆矢となったからであろう。

川口淳氏の学位請求論文は、題目が示すように清沢満之の「他者」問題を、清沢の「思想」という側面から考察するものである。氏は、これまでの清沢の思想への批判の多くが倫理関心に向けられていること、つまり清沢の思想が社会に対する全肯定の思想として、倫理的主体が欠如し、社会性が希薄であると批判されている状況について問題を提起する。つまり清沢の「他者」問題に対する多くの議論は、讃仰も批判も、それぞれのパラダイムで描いた清沢像のもとでなされている、というのが氏の基本的認識である。その議論を可能な限り正しい地平に定直し直すために、これまで清沢満之における「他者」に関する未開拓な面に光を当てることが氏の本論文の目的である。

氏は、清沢における「他者」について、本論文では、とくに倫理道德観、社会観、国家観に視点を定め、それらが清沢の思想や信仰とどのような関係にあるのかについて考察している。そして、清沢がそれらについて言及する主要なテキストに資料的な検討を加えることで、清沢の言説を確定し、かつ当時の関係文献を丁寧に渉猟することによって、清沢の言説を当時の時代社会の文脈の中に位置づけ直すことに努めるのである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章 本論の目的 —清沢満之という人と研究の可能性—

第一章 清沢思想の基礎的考察 —「有限無限」の思索を中心に—

- 1、本章の目的
- 2、有限と無限とは何か
- 3、語れない無限、語る無限
- 4、無限の擬人化 —阿弥陀仏—
- 5、無限が与える世界観 —浄土荘嚴—
- 6、本章のまとめ

第二章 信仰と倫理道德

- 1、本章の目的
- 2、宗教と倫理は同じなのか —井上哲次郎と清沢—
- 3、われわれには、倫理以上の安慰と根拠が必要である
- 4、宗教は真正の、歓喜の道德を生む
- 4—1、万物一体と、全責任無責任の思想から

4-2、同情心 —如来の光明の中にある自己—

4-3、内観主義 —その思想と誤解—

5、真正の道徳は倫理的苦悩を超える —全責任主義と無責任主義—

6、本章のまとめ —内観と無責任という語感の問題—

### 第三章 清沢と社会批判 —かれの仏教的社會観—

1、本章の目的

2、生存競争主義という思潮

3、清沢の反応

4、主我主義ではなく無我心

5、国家と不諍 —阿含經読誦から—

6、雑誌『政教時報』における生存競争主義批判

6-1、問題提起

6-2、雑誌『教界時言』と『政教時報』

6-3、「心霊の諸徳」のテキスト批判

6-4、「心霊の諸徳」における戦争と不諍

6-5、和合と同胞

7、社会主義への視点

8、本章のまとめ

### 第四章 『臘扇記』とエピクテトス—自己と他者の真の関係を求めて—

1、日記『臘扇記』とその倫理性

2、三つの日記

3、エピクテトスとの出遇い

4、なぜ、エピクテトスだったのか

5、エピクテトス思想とその影響

5-1、如意なるものとは何か

5-2、死の恐怖

5-3、エピクテトスの神への信仰

6、ジョージ・ロングの解説 —倫理を生む信仰—

7、自己とは何か

8、信仰と修善の関係と、信仰と理性の関係

9、真の友とは何か

10、本章のまとめ

### 第五章 「服従」思想を巡る問題

1、本章の目的

2、問題の所在 —清沢・暁鳥思想への「服従論批判」研究—

3、清沢とその弟子 —山本伸裕「精神主義」研究を踏まえて—

4、「服従論批判」の検証への入り口

5、『臘扇記』と「服従」という用語

6、『有限無限録』〔五三〕「執着は奴隷心の源なり」の考察

7、「明治三十六年『当用日記抄』」中の「奴隷」という用語

- 8、ソクラテスの見方にある「服従」という用語
- 9、「心霊の修養」と「服従の美德」における服従思想
- 10、「心霊の諸徳」の「従順の心」「和合の心」について
- 11、「服従」の誤解の可能性
- 12、論文「自由と服従の双運」の考察
- 13、本章のまとめ

## 結章

本論は五章で構成される。

第一章は、清沢満之における「他者」を理解するための基礎作業として、清沢の宗教哲学の基礎的な概念である「有限・無限」について論じている。従来、ほとんど注目されていない「無限の擬人化」という視点を取り上げ、ここに無限が他者と苦痛を共にしようとする意志の源泉をみている。

第二章では、清沢の「他者」観を、宗教（信仰）と倫理（道徳）との関係に見定め、清沢が①宗教は倫理的責任に対して安慰を与える、と同時に、②宗教は他者と関わる真正の道徳を生む源泉でもあると主張した事を論じる。とくに清沢の「内観主義」を「外面を無視した内面への沈潜によって他者理解が欠落した」とする批判のもつ問題点を整理している。

第三章では、清沢の「生存競争批判」が、当時の「生存競争、優勝劣敗」という社会思潮に対する仏教的社會観からの批判であることを論じている。具体的には、一般雑誌や宗門内の雑誌などを渉猟しながら、清沢の言説を、当時の思潮の中に定位する。あわせて清沢が社会主義に対してどのような見解をもっていたかを検討している。この章で、氏は山本伸裕氏の『精神界』掲載論文のテクスト批判という方法論にならない、『政教時報』に掲載された「心霊の諸徳」などにおける清沢の言説を確定することを試みていることは特記すべきであろう。

第四章では、清沢の日記『臘扇記』において展開される信仰から修善（修養）へという思索に、日記中に多く引用される古代ギリシアの哲学者エピクテタスの思想の影響があったことを論じている。従来、エピクテタスの思想が清沢の分限の自覚にもった影響はよく知られているが、清沢の関心がエピクテタスの思想の倫理性・社会性にあったという指摘は、これまで十分に考察されてこなかった視点である。

第五章では、暁鳥敏が『精神界』に掲載した「服従論」に見える倫理的主体が欠落した「服従」思想が、清沢の全肯定思想に基づくという批判について論じている。清沢における「服従」は、「如来への服従」を意味し、前章で論じたエピクテタスの倫理思想と深い関係をもっており、暁鳥の「男らしい服従」とは正反対の主張であることをさまざまな資料を通して論証している。とくに清沢の最晩年の論文である「自由と服従の双運」が清沢の「他者」理解についての核心となると指摘する。

「結章」において、川口氏は「今までの清沢批判は、清沢の周囲の人々の戦時下の歴史的帰結からその原因を清沢の思想に求めて」おり、それでは「清沢の社会に対する視点という側面が無化されてしまう」とし、本論文では、清沢が生きた「生存競争主義」「国家主義」という時代思潮の中で、なぜ清沢が倫理道徳と信仰との関係を晩年の大きな課題としていたか、また清沢が「関心を持って今この社会に語らねばならないと考えたもの」が何であったのかを「時代状況から導くことができた」と結んでいる。

## 2. 論文審査結果の要旨

上述したように、本論文は、清沢満之の思想に対する批判への応答を有効にするための地平を開拓するという課題のもと、清沢の讃仰者と批判者との清沢像を問い直すためのさまざまな新しい知見を提供するすぐれた論文である。

氏は序章において、福島栄寿、山本伸裕、近藤俊太郎、曾我量深などの諸氏の見解を取り上げて清沢の思想を研究する方法について検討しているが、氏が意図したほどに、みずからの方法論を明確にできたかは疑問である。氏にとって清沢が単なる研究対象となりえない以上、讃仰と批判との中立を目指すよりも、清沢批判に対して「事柄の是非をあきらかにする」姿勢に徹するべきではなかったか。氏が論文内で用いる表現を借りれば、清沢の敬愛したソクラテスの、いわゆる「弁明（ア

ポロジ―)」という態度こそ、氏の研究方法に相応しいのかもしれない。とくに第五章は、清沢批判に対する「弁明」の具体的な実践と位置づけるならば、その執拗な論証も納得できる。ただ、弁明には、弁解、申し開き、擁護に陥る危険が潜むことに自覚的でなければならぬだろう。この論文は、それらの危険を回避することができるような論理を展開できたのであろうか、もしくは文体を採用することができたのであろうか。この清沢批判に対する「弁明」というべき学的方法論の確立こそ、氏が本論文で試みようとしたことであり、今後の課題であろう。

川口氏は、清沢の「他者」観が、一貫して、仏教思想にもとづく如来の中に見出される「他者」を基礎としているとする。この指摘は重要である。さらに、清沢が「他者」理解において使用する儒教思想における「天」や「天命」、エピクテタスの哲学における「天帝」「神」など、さまざまな観念が、「如来」と共通する側面をもつとともに、それぞれが清沢の「他者」理解や社会実践にどのような役割をもつのかを明らかにすることができたならば、さらに充実した考察となったと思われる。

論文全体の印象としては、清沢の著述のみならず、当時の文献を丁寧に渉猟し、清沢の言説を当時の文脈の中に位置づけ直そうという苦勞を感じ取ることができる。そのことは503項目にわたる精緻で情報量豊かな注が証明している。この注が本文に活かされたならば、より説得力のある論文となったであろう。

審査会では、氏の論文における研究方法と、氏の論文の主題である「他者」という概念をめぐって活潑な討議がなされた。

福島栄寿審査員は、自身の論文を川口氏が研究の指針として紹介していること（序章）をうけ、「讃仰論、批判論、反批判論という水掛け論には意味がない」という自身が提起した課題が十分に理解されていないのではないかと、結局のところ本論文は「清沢を擁護するという立場」からなされた「清沢批判論に対する反批判論」ではないかと、との疑義が呈された。また氏が使用する「他者」という概念が素朴すぎるので、先行研究などによって確かめる必要があり、あわせて「他者」問題については、近年の清沢満之への批判者だけを問題とするのではなく、親鸞思想などより大きな思想史的な射程をもつことも必要ではないかと指摘した。論文の内容については、従来あまり詳しく取りあげられていない加藤弘之との対論を取り上げたこと、清沢のエピクテタス引用についての丁寧な読解について、とくに第五章において清沢の思想と暁鳥敏の思想を明確に区別すべき道筋を示した点などを評価した。

安富信哉審査員は、すぐれた論文であると評価した上で、氏が主題とする「他者」については、仏教思想における「他者」は人間以外も含む点や、また「他者」にも二人称の「他者」、三人称の「他者」などがあり、「他者」のさまざまな位相についても考慮すべきではないかと提案し、さらに清沢の「他者」理解における重要な思想である「万物一体」については、単に仏教における存在論的な真理にとどまらず、「万物一体の仁」（程明道）という表現もあるように実践的な思想であり、子安宣邦氏などが注目するように清沢と儒教思想との関係についても目配りが必要であることを指摘した。

審査員からの「他者を自己に取り込むような思想性についてどのように考えるか」という質問について、川口氏は、清沢の他者理解にはかぎりなく、他者の痛みを自己の痛みとし、かぎりなく暴力的でなく、他者に無上の価値を見いだすという視点があり、それらは清沢の「すべての衆生は如来の子である」という理解にもとづくものであると応答した。

審査員からは、論理展開や文章表現が十分に熟れていないため、読み手にとっては理解することが難しい箇所もあることが指摘されたが、それらの点は審査会における質疑応答を通して概ね解決することができた。

本論文は、上記したようないくつかの課題を残してはいる。しかし清沢の著述のみならず、同時代の周辺資料や、先行研究を丹念に読み込むという、誠実な姿勢で作成された論文であり、今後の清沢研究に多くの新しい知見を提供する力作であることは審査員一同の一致する感想であった。

審査に必要とされる最終試験および語学試験については、審査委員全員により2017年1月26日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して川口淳に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。